

て示し、この種の研究が、未開拓の状態におかれ、いまだ十分に理解されない部分が多い点を指摘している。
(口羽益生)

Kennedy, R. : Bibliography of Indonesian Peoples and Cultures. Behavior Science Bibliography, Revised edition. 1962. pp. xxii + 207

本書はエール大学並にその附属の Human Relations Area Files によって出版されたインドネシアの民族と文化に対する文献リストである。元来は Raymond Kennedy によって編集せられたものであるが、改訂版は Thomas W. Maretzki 及び H. Th. Fischer 氏の努力に負うところが多い。

この種の書物がエール大学に於て出版されるに至ったのは George P. Murdock の努力に負うところが多く、すでに北米に関する文献が 1941 年に Yale Anthropological Studies 第一巻として出版されているが、まことに貴重な努力と感謝する外はない。民族と文化に限ったという点もあって驚嘆すべき充実ぶりである。

編集の仕方もまた用意周到であって、まず Alphabetical Key to Islands, Peoples, Tribal Groups and Tribes の章を設けて部族名、島名等を詳細にあげ、次に雑誌名等の略符をあげる。これが 6 頁にも及んでいる。いかに雑誌論文などが詳細に調査してあるかが判る。

文献リストはまず Indonesia 全体に関するものをあげ、次に Sumatra, Borneo, Celebes, Java (and Madura), Lesser Sunda Islands, Moluccas に分類してある。

この各項目の中で、例えば Borneo については General, Bahau group, Ngadju group, Land Dyak group, Klamantan-Murut-Kalabit group, Iban (Sea Dyak), Punan group, Coastal Malay Buginese etc., Chinese, Karimata Island に分けて文献をあげており、又その民族の分布図をかかげて誰にもよく判るようにしてある。

このような文献集ができ上げるためには国際的な協力がなされており、例えば Cornell 大学の J. Echols, G. McT. Kahin, Library of Congress の C. Hobbs など国内の専門家というまでもなく、ライデンの Museum van Volkenkunde の J.P.B. de Josselin

de Jong, R. E. Downs, アムステルダム の Tropical Institute の M. W. Meyers, ユトレヒト大学の J. Gond, A. Teeuw, ジャカルタ大学の G. J. Held 氏などその一部である。

このようなリストが出来るとの協力者の組織などについても教えられるところが多い。

(棚瀬裏爾)

Государственное издательство иностранных и национальных словарей: Индонезийско-Русский Словарь. Москва, 1961, pp. 1171

An Indonesian-English Dictionary. Cornell University Press, Ithaca. Second edition 1963. pp. xviii + 431

最近、ソ、米からインドネシア語辞典の大冊が出た。前者は R. N. Korigodosky 他四人の編集で収容語数は 45000 とする。後者は J. M. Echols と H. Shadily の手に代るもので概算 20000 の見出し語数。語数は後者の方が少ないが序文にもある通り、現代の文献を読むに必要なものに制限したせいであろう。前者は古代の文学をも読解し得る語をも入れたとあり、又、民俗、習俗、生物語彙もこの方がずっと多い。後者は語彙は少ないが、各語の文例が相当詳しく出ている。辞書の生命は単に意味の対応訳を掲げるのではなく、いかにその語の適当な文例、使用例が出ているかにある。この点で後者は前者に優る（もっとも、完全という訳ではないが）。後者によって、所謂、辞書を読むこともできる。インドネシア語の特徴は語根語に接頭、接尾辞が付いて更に一つの単語が形成されることにある。語根語に接続可能な凡ての接辞を網羅的に示し、その用例をも掲げた辞書をもって最も完璧なものといえるのである。この両書には出ていないが、Saja be-rumah dikampung ini. <私はこの村に家(を)持つ。rumah=家>のような用例を示していたらきりが無いが、この点で両書は氷山の一角を載せているにすぎず、従来の辞書の域を全く脱していないといえよう。実際の言語の機能の状態はこの両書によってもまだまだ知り得ない。そのような意味での甘さがあることは充分念頭に置く必要がある。

次に音声、表記の説明であるが、ソの方はまだまだ米の構造主義言語学の風が吹き込んでいないらしく(私見では、全く興味を持っていないといえる)、旧来

通りでまず問題もないが(pp. 1105~), 米の方はそのような方法はそれで良いとして Echols は Phoneme の概念が充分分っていないらしい。例えば, hal <事>, sudah <既に> を /hal/, /sudah/ とする一方, achir <終> を /achir/ と解釈するのは何のことか (p. xvi)。achir の発音は [açir] であるが ç は前母音 i の環境によってそうなるからで, 音韻的には /ahir/ である。grapheme と phoneme とを混同してはいけない。更に ra'jat; rakjat <人民>, ma'; mak <母> ((', k は語中で表記上どちらも使われるか, 又は, 全く書かれない) を /raqjat/, /maq/ としてしまっているが, ta'at <信心>; takat <…迄> は夫々 /taqat/; /takat/ となって, 一律に彼のように解釈できない。その上, baik <良い> を /baiq/ とすると kebaikan <美点> は /kəbaikan/ であって /q/ ではない。即ち, 音韻的には baik, ra'jat; rakjat, ma'; mak など /q/ と /k/ とが allophone をなすと看さねばならない。(尚, 彼は ' と何の説明もない ' とを混同して用いているが統一すべきである。)

at random に語彙の方を見ると, ソの方で budu <魚の塩漬>, tuak <ヤシ酒>, unam <宿借り> などの訳に原語をそのまま示し, 説明的な意味が添えてあるが, 一体この原語がロシア語の中で借用語としてどの程度認められているのであろうか。一見科学的に見えるこの方法には問題がある。潔癖になりすぎて意志の疏通が計れないようでは言語の機能をなさない。両書に次のような生活必須語が欠けていた。pulun <(サロンなどを) 振って留める>, rimpi <干しバナナ>, selajun <鳥威し> 等々。又, 語源が両書において全く記入されていないが, 特にサンスクリット, アラビア, 近年では, ポルトガル, オランダからの借用語が多いインドネシア語では, 少なくとも前者の記入が使用者の大部分にとって必要であろうと考えられる。但し, 新語が数多く取入れられてあるのは, やはり新しい辞書だけの価値がある。両書でお互いの短所を補いつつ活用すれば, それに越したことはない。(崎山 理)

Teeuw, A.: A Critical Survey of Studies on Malay and Bahasa Indonesia (Koninklijk instituut voor taal- land- en volkenkunde. Bibliographical Series 5). 'S-Gravenhage, Martinus Nijhoff. 1961. pp. 176

マライ (インドネシア) 語の最古の碑文 (7 世紀) から現在までのマライ語研究史である。これまでに出了れた英, 仏, 独, 蘭, マライ語の殆んど凡ての論文, 書物が p. 91~157 に文献目録として掲げられており, これだけでも結構役に立つ訳であるが, 前半は, マライ語のどういう部門の研究が誰によってどのようになされてきたかが36項目にわたって手際よく述べられてある。Teeuw は彼の見解を加えず出来るだけ客観的に今までの研究を並べ立てるという態度を取っており, それによって現在までの研究傾向が分り, そして今後の研究に無駄のない指針が与えられるであろう。マライ語の言語学的研究において, 音韻, 形態の面では優れた成果も現われているが, 彼もいっているように "syntax" (特に "sentence pattern" 「文型」 という概念をも含めていっているのであろう) の研究は未だ "virgin field" のまま残されている (p. 30)。マライ語は, 文の中の語詞同志の結びつきが比較的柔らかく, それらが自由に動き得るところからかつて Marsden がマライ語の文の構成は "natural course of ideas" にあるといて深い研究に進もうとしなかった傾向は, 確かに今も続いているのである。何か暗黙のうちに分ったものとして扱われてきた "syntax" を今後科学的組上に載せなければならない。

36項目のうち, 最後の4項目は現地で定期刊行物, "Dewan Bahasa" 「言語会議」, "Pembira Bahasa Indonesia" 「インドネシア語建設者」, "Medan Bahasa" 「言語界」, "Bahasa dan Budaya" 「言語と文化」誌上における種々な言語問題, 論争が取上げられてある。特に「受動形」「能動形」の用法の区別の問題は前世紀に始まって (p. 28) 今だに論議されているのである (p. 78, p. 83)。現地人の自国語に対する研究意欲を見るとこの言語の将来が頼もしく思われる。

尚, この書においてマライ語諸方言の項は不完全だから, その中でも今までに出了れたこの同じ Series には入っている "A. A. Cense: Languages of Borneo. Series 2, 1958.", "P. Voorhoeve: Languages of Sumatra. Series 1, 1955." を参照するのがよからう。方言の調査研究はまだ不備だから, これからも強力に行なわれる必要がある。Teeuw は現代最も活躍しているオランダ人のマライ語学者であ